

令和 3 年 6 月 28 日現在

機関番号：33306

研究種目：基盤研究(C) (一般)

研究期間：2017～2020

課題番号：17K12533

研究課題名(和文) 地域特性や保護者の受容状況に応じた発達障害児の早期療育に向けた保健師による支援

研究課題名(英文) Support provided by public health nurses for early support for children with Autism Spectrum Disorders, depending on regional characteristics and parental acceptance status

研究代表者

子吉 知恵美 (Neyoshi, Chiemi)

金城大学・看護学部・講師

研究者番号：50363784

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 2,600,000円

研究成果の概要(和文)：地域特性や保護者の受容状況に応じた発達障害児の早期療育に向けた保健師による支援として、発達障害児支援を行った経験のある農村部・離島の保健師の面接調査結果をまとめた。保健師による支援内容の記述データから、カテゴリを【 】、サブカテゴリを< >、記述例を「 」としてまとめた。【支援体制を整える】【保護者の気づきを支援する】【保護者の思いを支援する】などがあつた。その中で【支援体制を整える】では、<発達障害児を支援できる保育士づくりをする>、【保護者の気づきを支援する】で<子どもの発達障害に気づける親づくりをする>という保健師の実践についてパンフレットとしてまとめた。

研究成果の学術的意義や社会的意義

就学前の発達障害児への支援の中で、保護者の受容状況に応じた支援方法については地域や支援者個人によるところが大きく、支援指針のようなものはない。そのような中で保健師として、保護者の受容を支えながら支援する実践例をパンフレットとして示すことができたと考える。ルーラルエリアでの実践ではあるが、保健師の支援実践としては、都市部や農村部、離島などの地域特性によらずとも、共通する核となる実践の例であると考えた。地域により地域性があるが、保健師としてどう実践していくか、勇気をもたえる実践例であった。新人保健師の指針の1つになると考え、学術的・社会的意義もあると考える。

研究成果の概要(英文)：We conducted interviews with public health nurses in rural areas and remote islands with experience supporting children with developmental disorders. From the results, we listed nurses' support practices to enable early intervention for those children, tailored to local characteristics and the level of parental acceptance of their child's disability. From the text data, we developed categories as [], subcategories as < >, and listed examples of responses as ". Categories included [organising support systems], [assisting parental recognition of their child's disorders], and [supporting parents' feelings]. We created a pamphlet consisting of the nurses' support practices that were described as <training childcare workers who can support children with developmental disorders> under the category of [organizing support systems], and <educating parents to notice their child's developmental disorders> under [assisting parental recognition of their child's developmental disorders].

研究分野：在宅看護学

キーワード：発達障害児 保健師 受容 支援

1. 研究開始当初の背景

1) 「発達障害者支援施策検討会(H20)」の報告で、乳幼児健診等による早期発見や就学時健診における発見ならびに早期療育へつなげることは、保健師の役割として示されている。一方、支援方法については蓄積されているが、多くがその地域や支援者個人の支援方法にとどまっているのが現状である¹⁾。保健師が子どもの発達障害の基礎的な部分かわからない、あるいは子どもの発達の問題に対する気づきがない保護者や気づきはあるが支援を受けることに対し否定的な保護者の支援に困るという状況がある²⁾³⁾。

2) H27年-28年にpilot studyを実施した。療育機関がないへき地において、保健師が保育士への研修やコーディネーターの派遣を企画し、保育士の発達障害児への療育技術向上に取り組む結果が得られた。以上より、地域特性に応じた保健師による支援に着目した。発達障害児への早期支援は、児童虐待防止や就学後の不登校・精神疾患等の二次的不適応を防止する点からも期待されている⁴⁾。また、核家族による保護者の孤立など家族全体を捉えた保健師による支援が保健師の重要な役割の1つである⁵⁾。本研究において、全国に渡る調査事例の蓄積から地域特性を踏まえた発達障害児の早期療育のための保護者の受容状況に応じた保健師による支援の指針を得ることは学術的にも意味があると考ええる。

3) 各市町村において、障害児の地域生活支援の中で、発達障害児の地域生活支援事業がすすめられ、発達障害児の療育や保護者への支援を行うための整備が重要視されている⁶⁾。

以上より、発達障害児の二次的不適応や児童虐待の観点からも、就学前の早期支援・早期療育が重要である。地域特性を踏まえた発達障害児の保護者の受容状況に応じた保健師による支援方法の指針について検討することは、発達障害児支援の喫緊の課題であり、地域生活支援をすすめる上でも重要であると考ええる。

2. 研究の目的

本研究の目的は、地域特性を踏まえた発達障害児の保護者の受容状況に応じた保健師による支援方法の指針を検討することである。発達障害児の早期療育に向けた保健師による支援は、保護者の受容状況に応じた支援や地域特性が大きく影響すると考える。保護者の受容状況は、保護者の生活観・価値観によって異なり、支援体制を含めた地域性の影響も大きいと考える。地域生活支援の発達障害児支援を整備する上でも地域特性を踏まえた支援は重要である。本研究において、地域特性や保護者の受容状況に応じた発達障害児の早期療育に向けた保健師による支援を明確にし、保健師の支援指針を発達障害児支援を行っている保健師に返すことを目的とする。

3. 研究の方法

1) 調査対象は、発達障害児支援を行った経験のある農村部・離島の保健師23名である。

調査項目は、①発達障害児の早期支援のための支援体制について、②発達障害児の保護者の受容状況に応じた支援について、③子どもの発達障害が受容できない段階の保護者に対する支援について、である。

2) データ収集方法：面接調査への承諾が得られた保健師23名に対し、面接調査を実施した。

面接調査は、60分程とし、調査項目に沿って実施した。

3) 分析方法：

(1) 質的統合法による分析

調査項目ごとに逐語録を作成し、保健師による支援について焦点を当て、保健師による支援内容を理解可能な最小単位で抜き出し、コードとしてまとめた。コードの類似性と差異性を比較検討し、共通する意味を持つものを分類し、抽象化のレベルを比較しながら、サブカテゴリ・カテゴリ化を行った。サブカテゴリの再編を繰り返し、カテゴリ化の際には、発達障害児とその保護者に対する早期支援に向けた保健師による支援の視点に基づいてカテゴリの統合を進めた。

(2) テキストマイニング分析

逐語録をデータとし、テキストマイニング分析による形態素解析はKH Cordを使用した。以下の～の手順に従って分析した。

形態素解析：23事例分の記述データ3254件をすべてExcelにまとめ、テキストデータを作成し、これらに形態素解析を適応して特徴語とする形態素の取捨選択を行い、抽出語と出現回数について分析した。

②多次元尺度法：キーワードの抽出語から、多次元尺度法を行い、横軸に次元1、縦軸に次元2の散布図を示した。同じ段落によく一緒に出現する語の共起を探る。

共起ネットワーク：記述データの出題パワーンの似通った語(共起)の程度が強い語を線で結んだネットワークを描き、全体の共起を探る。データの前方は農村部データで、後方が都市部となっている。前方での出現が白、後方での出現が黒で示す。

4) 倫理的配慮

本研究において面接調査に研究協力を得る保健師には、研究目的を書面と口頭にて説明し、協力はあくまで自由意思であることを伝えた。匿名性の確保とともにデータは個人を特定できるような表現は避けた。また、地域の特定ができないよう分析を行った。また、研究目的以外に使用しないことを約束した。石川県立看護大学の倫理審査の承認(看大第227号)を得て行った。

4. 研究成果

事例23件を質的に分析した結果、子どもと保護者の状況、保健師による支援の2つがあり、3526件抽出された。

1) 研究対象者の概要

面接調査に協力してくださった保健師は、20代～50代の保健師23名である。保健師経験年数かつ発達障害児支援経験年数が11年以上の保健師が、16名であった。

2) 子どもと保護者・家族の状況

「子どもと保護者・家族の状況」として抽出されたサブカテゴリ・カテゴリからコアカテゴリにまとめた。コアカテゴリには、《支援環境と気づきの現状》《支援体制の現状》があった。

3) 保健師による支援 (図1)

地域特性や保護者の受容状況に応じた発達障害児の早期療育に向けた保健師による支援とし

て、発達障害児支援を行った経験のある農村部・離島の保健師の面接調査結果をまとめた。保健師による支援内容の記述データから、カテゴリを【 】、サブカテゴリを< >、記述例を「 」としてまとめた。

【支援体制を整える】保護者の気づきを支援する【保護者の思いを支援する】などがあった。

【支援体制を整える】は、【保護者の気づきを支援する】【保護者の思いを支援する】の双方を支える支援実践であると考えられる。保護者が子どもの発達障害に気づけるような支援実践、支援体制整備により家族の思いに寄り添う包括的支援実践が相互に関連しあいながら、支援実践している構造が考えられた。その中で【支援体制を整える】では、<発達障害児を支援できる保育士づくりをする>、【保護者の気づきを支援する】で<子どもの発達障害に気づける親づくりをする>という語りが保健師の実践としてあった。

保護者が子どもの発達障害に気づけるような支援実践では、家族の自己効力感を高めることとは、発達障害児の家族のエンパワーメントを高めることであり、エンパワーメントを高めるためには、対象のサポートニーズを把握し、地域のリソースやサポートに確実につなげることや保護者の自己効力感を向上させるような多職種での関わりや連携を考えることが重要である⁷⁾。ここから、家族基盤の把握とともに、<家族のニーズに応じた支援をする>よう、そのときのニーズを見極めながら支援することが子どもの発達障害への気づきを得るための支援実践の1つになると考えられる。

テキストマイニングにおいては、形態素解析においては、「お母さん」という単語が一番多く、多次元尺度法では、クラスターごとにわかれており、散布図で近くにある語ほど、データ中で共起していたと考える。たとえば、緑の丸の「子」「思う」「支援」「先生」「保健相談」「発達」「療育」「お母さん」「見る」「入る」「言う」などが重なりあうように示され、共起した。頻出語においても「お母さん」のほうが「お父さん」の7倍出現していた。また、多次元尺度法では、「お母さん」は「言う」「行く」と行動面を表す動詞とも共起し、「お子さん」とも強く共起している共起ネットワークでも、「お母さん」「子」「保育」と共起し、実際の子育てを行っている様子が示された。児童ディサービスに通う発達障害児の保護者への面接調査では、面接協力者の家族はすべて母親であった⁸⁾。母親は父親よりも子どもと一緒にいる時間が長く、多職種と協働する母親のストレスの方が大きいといわれている⁹⁾。

このように、発達障害児の療育のキーパーソンであることが多い母への支援の重要性が示されていると考える。都市部では「発達」「センター」「療育」のような支援機関があり、農村部では支援機関が少なく、「保育」が共起することからも保育園の果たす役割が大きいと考える。そして、「家族の力関係を見極めた上で支援する」「家庭内で子どもの発達に対する理解が得られるよう支援する」とあるように、家族の中での母親の位置を確認しながら、時に家庭内での理解の調整を図ることも【家族の気づきを支援する】ための支援実践であると考えられる。

図1の共起ネットワークにおいては、農村部(白)は、「お母さん」「子」「保育」がつながっており、都市部(黒)は、「発達」「療育」「センター」があり、双方ともに「障害」「支援」がある。また、それぞれの出現語同士の相関係数が線上に記入されている。また、語の出現数に合わ

せて円のサイズが変化し,円が大きいほど語の出現数も多いことを表している.前方での出現として,頻出であったのは「お母さん」「子」「保育」「診る」である.「子」から「お母さん」,「子」から「保育」につながっている.「お母さん」から「相談」「お子さん」につながっており,「相談」「お子さん」は後方での出現である「発達」につながっている.「発達」からは「障害」「支援」「センター」「先生」「相談」「お子さん」「気」「子ども」「診る」につながっている.「療育」と「機関」,「教室」と「親子」,「診る」と「健」,「障害」と「発達」は相関係数が高い.

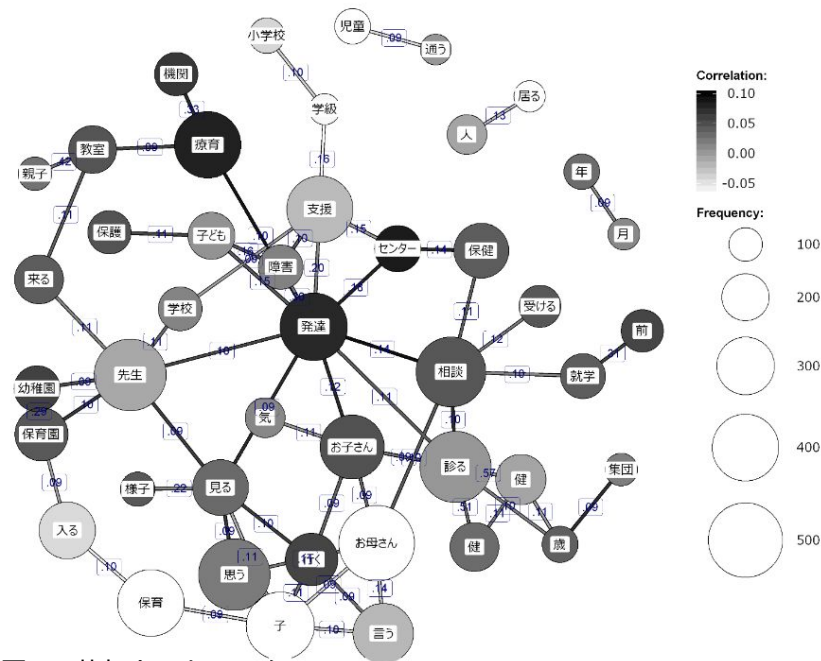


図1 共起ネットワーク
白：農村部、黒：都市部

引用文献

- 1) 上平公子, 長尾志津香, 山田小夜子, 他: 地域での発達障害支援システムにおける保健師の着眼点, 岐阜医療科学大学紀要, 第6号, 117-120, 2012
- 2) 上原真理子, 譜久山民子, 宮城雅也, 他: 発達障害を持つ子どもの早期発見・早期支援に関する保健師の課題, 沖縄の小児保健, 39, 35-39, 2012
- 3) 子吉知恵美, 発達障害児の早期発見のための5歳児健診に対する保護者の意識調査, 小児保健研究, 71(3), 435-442, 2012
- 4) 国民衛生の動, 厚生労働統計協会, 2016/2017, 63(9), 387, 東京
- 5) 子吉知恵美, 田村須賀子: 発達障害児の保護者の発達障害に対する受容状況および発達障害児とその保護者への保健師による援助方法, 家族看護学研究, 18(2), 83-94
- 6) 地域生活支援事業実施要綱, 厚生労働省, 2006
- 7) 涌井理恵, 藤岡寛, 古谷佳由理, 他: 発達障害児を養育する家族のエンパワーメントに関連する要因の探索 Family Empowerment Scale 日本語版を用いて, 小児保健研, 70(1), 46-53. 2011
- 8) 子吉知恵美, 田村須賀子: 発達障害児の保護者の発達障害に対する受容状況および発達障害児とその保護者への保健師による援助方法, 家族看護, 18(2), 83-94. 2013
- 9) Little, L.: Differences in stress and coping for mothers and fathers of children with Asperger's syndrome and nonverbal learning disorders, Pediatr.Nurs., 28, 565-570. 2002

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕 計0件

〔学会発表〕 計0件

〔図書〕 計0件

〔産業財産権〕

〔その他〕

-

6. 研究組織

	氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考
研究分担者	田村 須賀子 (tamura sugako) (50262514)	富山大学・学術研究部医学系・教授 (13201)	
研究分担者	千原 裕香 (chihara yuka) (50738408)	石川県立看護大学・看護学部・助教 (23302)	

7. 科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕 計0件

8. 本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関